

横山ゆずり作 「受験」

< 前編 >

(効果音) (終業のチャイム。教室のガヤ)

宮崎妙子 光江、今日、部活出られる？

高倉光江 あ、ごめん。あたし今日パス。塾でコンピューターテストの日だから。少しやっ
とかなないとマズいんだ。

妙子 そっか。光江は選抜クラスだもんね。お互い受験生はつらいよね。でも金曜日は出たほうがいいよ。文化祭の英語劇の通しげいこだから。水谷先輩も来てくれるらしいし。

光江 へえ。水谷先輩来るんだ。じゃ出ようかな。とにかく今日は悪いけどお先ね。

二人 (互いに)パイパイ。

光江ナレーション あたし、高倉光江。青春中学3年生。そう、ただいま受験生というわけ。夏休みも終わって、学校は体育祭だ、文化祭だと盛り上がってるけど、受験生にとっては入試まであと何か月と迫って、少し気持ちもアセリ気味。英語部の練習も最近休み勝ち。まあしょうがないと思ってる。だって、あたしには、どうしても入りたい高校があるんだもん。

(効果音) (ガラガラ戸を開ける音)

光江 ただいま。

昭代 あ、お姉ちゃん。お帰り。

光江 あれ、昭代。今日は塾の日じゃなかったっけ？

昭代 うん。でも休むの。クラスのね、広田さんのお誕生B会に呼ばれてるから。

光江 へえ、のん気ねえ。あんただって、一応受験生だっていうのに。

昭代 いいもん。あたしはどうせ“一応”の受験生ですよー。中学に落ちたら、公立の青春中学に行けばいいもん。お姉ちゃんとは違うの。

光江 今からそんなこと言ってる、本当に落っこっちゃうよ。

昭代 平気平気。あ、時間だ。じゃ行ってきまーす！

光江 あーあ、全く子供はのん気でいいなあ。あたしは、昭代みたいに気楽にはしてられないわ。

ナレーション そして、その週の金曜日、あたしは久しぶりに、英語部に顔を出した。

光江 こんにちは。

部員たち A「あ、高倉先輩、こんにちは。」B「光江、久しぶりじゃん。」C「光江、元気？」

水谷先輩 よお高倉、元気か？

光江 あ、水谷先輩。こんにちは。お久しぶりです。

水谷 最近、ずっと休んでるっていうから、心配してたんだぞ。勉強、頑張ってるの

か？

光江 はい、受験生はつらいですよ。

水谷 まあ、たまには部活に出るのも息抜きになるぞ。

光江 はい。

ナレーション 水谷先輩は、英語部のOB。時々顔を出しては、あたしたちの練習を指導してくれる。それ以外にも、何かと相談に乗ってくれるんで、後輩の信頼度は抜群。それに、先輩は教会に行ってるので、たまにアメリカ人の宣教師さんとかを連れてきてくれるのも、おいしい話ってわけ。

妙子 光江ったら、「金曜日は先輩がくるから」って言ったら、こういうときだけしっかり出てくるんだから。普段は、塾が忙しいって、ここんとこずーっとサボってたぐせにさ。

光江 別に、そういうわけじゃないけどさ。

水谷 ま、とにかく、文化祭までは頑張れよ。いくら受験生だったって、中学3年生の時の思い出が、受験一色ってのも寂しいからなあ。

妙子 さすが先輩、やっぱりいいこと言うなあ。

水谷 おだてたって、今日は何もおごらないからな。

妙子 なーんだ、残念。(笑)

ナレーション 正直言って、その水谷先輩の言葉、あたしにとっては少しチクリと来た。確かに、このまんまじゃ、あたしのこの1年間は、勉強ばかりになっちゃう。最近、友達にも付き合いが悪くなったって言われるし。そう言われてみると、受験勉強すればするほど、友達のこととか、部活とか、そういうのが煩わしい、無駄なものに思えてくることもある。クラスの男子が、陰であたしのこと、「ガリ勉」って言うてるのも知ってる。でも、あたしには、どうしても入りたい高校があるから…。いいえ、入らなくちゃならないんだ。だって…。

(音楽)

(効果音)

母 (ブリッジ。場面変わって、夜、自分の部屋。)

母 (ドアをノックする音)

母 みっちゃん、入るわよ。ずいぶん頑張ってるじゃない。調子はどうなの？

光江 うん、まあまあだよ。

母 この分だと、高嶺高校も夢じゃないって、この間、面談の時に、先生おっしゃってたわよね。やっぱり、大学進学率も、高嶺は抜群だし、あそこに入れたらお母さんも安心だわ。

光江 分かってる。…今日は、お父さんは？ まだなの？

母 いつものことよ。どうせまた、会社の人と飲んで、マージャンでしょ。家庭のことなんて、これっぽっちも考えてないんだから。お給料運んでくりにゃいいと思ってるのよ。

光江 ねえ、それじゃお母さん、何でお父さんと結婚したの？ 昔は優しかったの？

母 昔からああいう人でしたよ。お母さんたちの若いころはね、女は、年ごろになったら、親や周りの人が勧めるところに嫁いで、家庭に入るのが当たり前だったの。もちろん、女の人でもバリバリ働いて、活躍してる人もいたわよ。でも、そういう人は、ごく一部。お母さんみたいに平凡で何もできない女は、望んでくれる人がいれば、嫁に行くのが幸せだって言われて、結婚して、あなたたちが生まれて、いつの間にか15年以上もたったけど…。(ため息)

光江 お母さん、今、幸せじゃないの？

母 あなたたちを生んで育ててきたことは後悔してないわ。でも、みっちゃんや昭代には、お母さんみたいな生き方をしてほしくないな。男の人に養ってもらわなくてもいいように、しっかり仕事を持って、経済的にもちゃんと自立していけるようにならなくちゃ。

光江 そのためには、学歴も必要です。だから、ちゃんとした大学に入れるように、進学率のいい高校に入らないと」って言いたいんでしょ？

母 そうよ。高嶺に入るのは、自立した女の人生を歩むための、第一歩なんですからね。

光江 分かってます。だから、あたしも頑張ってるんだもん。あたし、もっと勉強して、手に職を持って、結婚なんかしないで、一人で生きていくんだから。…ほら、勉強の邪魔だから、行った行った。

母 あまり無理しすぎないようにね。

光江 はいはい、お休み。

(効果音) (バタンとドアを閉める音)

ナレーション (ため息)お母さんみたいな生き方、正直言って、あたしもしたくなかった。ろくに会話もしない夫婦。生活のために養ってもらわなくちゃいけないような、そんな生き方はイヤ。そんなお母さんを見ているから、余計に受験にこだわってしまうのかもしれない。今は、いろんなことを我慢しても、将来の自由な人生を手に入れるためには、しょうがない。…そんなふうにさえ思えた。それから、ますます高嶺高校を目指して、入試を突破することだけを中心に、毎日の生活が過ぎていった。そんなある日のこと。

(効果音) (教室のガヤ)

光江 妙子、今日、塾行く？

妙子 うん。来週は校内学力テストじゃない。それでさ、あたし理科で分かんないところがあるから、今のうちに聞いてこうと思って。

光江 そっか。あたし、学力テスト終わるまでは、うちで勉強するから、「休む」って言うといてくれないかなあ。

妙子 いいよ、分かった。何しろ、今度の学力の結果は、入試に大いに関係あるって、この間先生に散々脅かされたもんねえ。お互いに頑張ろうね。もっとも、あたしは

光江みたいに、高いところ目指しているわけじゃないからいいけどさ。

光江 何言ってるのよ。あたしだって、ほどほどだよ。じゃあね。

ナレーション 内心は“ほどほど“ どころではなかった。今度の学力テストの結果によっては、高嶺高校受験をあきらめるよう、先生から言い渡されるかもしれないのだ。あたしは、今度のテストにかけていた。そして、自分にとって、少々物足りなさが残るものの、まあまあ出来でテストを終え、久しぶりに塾に行った日のこと。

塾の先生 高倉、久しぶりだな。どうだった、この間の学力テストは？

光江 はい、まあ何とか。ちょっと社会で失敗しちゃって。覚えてないところが出ちゃったんです。

先生 ああ、江戸時代の町人文化のどこか？ 試験前に渡したプリントに、ちょうどまとめた範囲だったはずだよ。ああ、お前、しばらく休んでたもん奈。お前にも渡してくれるように、宮崎に頼んどいたんだけどな。忘れちゃったのかな。

光江 妙子に？

先生 ああ。あれを見とけば、バッチリだったんだけどなあ。惜しかったな。ほかの教科はどうだった？ (FO)

光江モノローグ 妙子ったら、ひどい。今度のテストは、すごく大事だって分かってるくせに。

ナレーション ついカーッと頭に血が上ったあたしは、思わず妙子の家に押しかけ、きつい口調で詰め寄っていた。

光江 妙子、塾の先生がテスト前にくれた社会のプリント、どうしてあたしに渡してくれなかったの？ あれがあったら、あたし、社会もっと取れたのに。

妙子 え、社会？ プリント?...あ、ごめん、忘れてた。そうだ、学校で渡しちゃまずいから、後で光江の家に届けようと思って、忘れちゃったんだ。本当、ごめんね。

光江 ウソよ。忘れたなんて、ウソでしょ。本当は、分かってて、わざとあたしに渡さないようにしたんでしょ？ そりゃそうよね。受験なんて、みんなライバルなんだから、一人でも失敗すれば、自分の偏差値が上がる。そうでしょ？

妙子 違うよ、光江。本当だってば。

光江 あたしが、あのテストでどんなに必死だったか、あんただって知ってたはずじゃない。それなのに、わざと意地悪して。きつといい気味だと思って、笑ってたんでしょ？

妙子 そんな、ひどい...。

ナレーション 興奮していたあたしは、自分の言った一言が、どんなに妙子を傷つけたか、その時はまるで気づいていなかった。それがどんな結果を招くかということも...。

< 後編 >

ナレーション あたし、高倉光江。青春中学 3 年生。高校受験まであと 3 か月と迫り、気持ちもアセリ気味のこのごろ。どうしても高嶺高校に受かりたいと願っているあたしは、

自分の学力テストの結果を考えるあまり、大切な友達に、ひどいことを言ってしまった。

光江 妙子ったら、ひどい。あたしに、わざとテスト範囲のプリント、渡さなかったんですよ。忘れたふりなんかして？

妙子 違うよ、光江。本当に忘れたんだよ。

光江 ウソ。本当は、あたしが困るのをいい気味だと思ってたんでしょ！

妙子 そんな、ひどい…。

ナレーション 自分でも、取り返しのつかないことを言ってしまったと思った。でも、その時のあたしには、どうしても素直に謝ることができなかった。その日以来、妙子とは、学校で顔を合わせても気まずい雰囲気のまま、何日かたった、ある夜のこと。

母 (階下から) みっちゃーん、電話よ。英語部の先輩の水谷さんって方。

光江 水谷先輩？ 何だろう…もしもし、お電話代わりましたけど。

水谷 (フィルター音) あ、もしもし、高倉？ おれ、水谷だけど。

光江 先輩、どうしたんですか？

水谷 (フィルター音) うん、実は昨日、宮崎から相談を受けたんだ。高倉のこと。

光江 妙子が？ 妙子、何て言ったんですか？

水谷 (フィルター音) お前に誤解されてつらいって言ってたぞ。本当なのか？

光江 ……

水谷 (フィルター音) 宮崎は、お前に悪いことしたって泣いてたんだ。そんな友達のこと、お前、赦^{ゆる}してやってもいいんじゃないか？

ナレーション その時、あたしはなぜだか分からないけど、無性に腹が立った。妙子にも、水谷先輩にも。そして、もしかしたら、自分自身に対して一番腹が立っていたのかもしれない。友達に心ない言葉をぶつけてしまった、心の狭い自分。そんな自分の醜さに気づいてはいても、人からそれをはっきり着きつけられた時に、どうしても素直に認めることができなくなってしまった自分に。

光江 先輩、話ってそれだけですか？ 妙子が何て言いつけたのか知りませんが、「あたしはもう顔も見たくないから」って言っといてください。

水谷 (フィルター音) …..そうか。残念だな。お前、自分の友達も信じられないような子になってしまったのか。受験が、お前の性格をそんなにゆがめちゃったのかな。もっと、人のこと信じられる子だと思ってたよ。

光江 失礼します。

(効果音) (ガチャンと受話器を置く音)

ナレーション 先輩からの電話があった日以来、あたしはもう、受験勉強だけがすべてになってしまった。友達との友情も、学校生活の楽しみも、目に入らなかった。こうして冷たい秋が過ぎ、12月に入った。街では、あちこちににぎやかなジングルベルの音が鳴り響いていた。

昭代 (オフ。遠くで)ねえねえ、お母さん。あたし、今年のクリスマスプレゼントは、新しいダッフルコートが欲しいな。

母 何がクリスマスですか。あなただって、中学を受験しようっていうのに、そんなに浮かれてる場合じゃないでしょ。

昭代 ね、お願い。勉強も頑張るから。だって、今のコート、小さくなっちゃって、ヘンなんだもん。

母 そんな調子じゃ、どこの中学も受かりませんよ。お姉ちゃんを見てごらんさい。追い込みの時期だから、毎日、夜中まで頑張ってるじゃないの。

昭代 お姉ちゃんはお姉ちゃん、あたしはあたし。どうせあたしは、頭悪いもん。でもね、女の子は、あんまりがり勉する子より、少しくらい頭の悪いほうがかわいいって、お父さん、言ってたもん。

母 まあ、お父さんったら。

ナレーション そんな妹の言葉をよそに、あたしの受験勉強も。追い込みに差しかった。のんびりしたお正月ムードも、3月までお預け。“受験生の正月は3月だ”って塾で言われたからってわけではないけど、季節感をゆっくり味わっている暇はなかった。そして、いよいよ受験の季節の到来。あたしより一足先に、中学を受ける妹の昭代が、本番を迎えた。その結果発表の日。

母 昭ちゃん、おめでとう。あんなに遊んでばかりいたのに、まあよく受かったわねえ。

昭代 実力実力。あーよかった。これであたしはもう、高校受験も大学受験もしなくていいんだあ。

ナレーション 本当に信じられないことだが、妹はN女子学院中学に合格してしまったのだ。N女子学院自体はそれほどレベルの高い学校でもなく、うらやましいわけでもなかったが、お祝いに駆けつけてくれた親せきの伯父さんとお母さんの会話を聞いた時、あたしは思わず耳を疑った。

伯父 佐知子、本当におめでとう。昭代ちゃんもこれで安心だね。何しろ、短大までエスカレーター式に約束されているんだからねえ。お前んところは、光江ちゃんはまだじめで頑張り屋さんだし、昭代ちゃんも中学に受かっちゃったし、姉妹そろって出来がよくてうらやましいねえ。

母 いいえ、そんな、とんでもないですよ、兄さん。まあ昭代はもともと勉強が好きな子じゃないし、N女子ぐらいでも短大まで行ければ御の字なんですよ。ほんと、要領のいい子だと思って、親もあきれてるくらいなんですけどねえ。

伯父 光江ちゃんのほうは、今度どこを受けるの？ やっぱ高嶺？

母 ええ、まあ本人はそのつもりで頑張ってるみたいなんですけどねえ。どうなることやら。何だか手に職を持って自立するから、それにはいい大学に行かないと」って張り切ってるんですけどねえ。

伯父　　へーえ、最近の若い子はしっかりしてるねえ。自立した女ってのがはやってんのかねえ。でもわたしは、あんまりカリカリ勉強しないで、早いところ嫁さんに行ったほうが、幸せだと思うけどねえ。しかしお前んところは、そうやって考えると、お姉ちゃんと昭代ちゃんは正反対だねえ。

母　　そうなんですよ。上の子は、まじめで融通の利かないところが、父親によく似ててね。下のは、口ばかり達者で、要領がいいというか。でも二人を見てると、女の子としては、昭代みたいなほうが、もしかしたらかえって幸せなのかな、と思ったりすることもあるんですけどね。

伯父　　そうだねえ。

ナレーション　　ショックだった。今まで、母に言われたことを信じて、なりふり構わず受験勉強に打ち込んできたのに。今まであたしが友達も失ってまで頑張ってきたのは、何のためだったんだろう。そう思うと、ただむなしさだけが一杯になって、いつしかあたしは、木枯らしの吹く寒い夜の街に飛び出していた。

(音楽)　　(暗い感じ)

母　　みっちゃん、みっちゃん、気がついた？

光江　　あ、お母さん。あたし、どうしたの？ 頭...痛い。

昭代　　お姉ちゃんたら、夜、コートも着ないで急に出てったと思ったら、10 時過ぎに帰ってきて、それから熱出して倒れちゃったんだよ。

光江　　...あ、そうだった。あたし、駅前をフラフラずーっと歩いてたんだっけ。体が熱い。

母　　一体どうしたっていうの？ 39 度も熱があるのよ。大切な入試の直前だって言うのに、みっちゃん、何があったの？

光江　　何でもない。

母　　何でもなくてあなたがこんなことするわけないでしょう。どうしたの？ 学校で何か言われたの？

光江　　何でもないったら！ もうお母さんも昭代もあっち行ってて！ あたし、休みたいの。

ナレーション　　母に本当のことを言えるわけがなかった。たとえ言ったとしても、今のあたしの気持ちは、分かるはずがなかった。あんなに一生懸命やってきた結果が、もうすぐそこだというのに、もうそれもどうでもいいように思えてきた。次の日の夕方

。　　。

母　　みっちゃん。お友達がお見舞いに来てくださったわよ。

光江　　だれ？

母　　妙子さん。それに、英語部の先輩の方。

光江　　妙子？ 会いたくない。帰ってもらって。

母　　そんなこと言ったって、せっかくなら来てくださったのに、悪いじゃないの。

光江 イヤなの。勉強の前の大事な時に、こんなになっちゃって。惨めな姿、見せたくない！

母 そんなわがまま言っていないで、とにかく、ちょっと上がっていただくわよ。せっかく寒い中いらしたんだから。

(効果音) (とんとん階段を登ってくる音)

妙子 光江、具合どう？

光江 (寝たふりをして答えない)

妙子 お母さんに聞いたけど、もう少しで肺炎になるところだったんだって？ よかったね、ただの風邪で。

光江 いっそ、肺炎にでもなったほうがましだったわよ。

水谷 そんな強がり言うもんじゃないぞ。せっかくここまで頑張ってきたんだ。もう一息じゃないか。

妙子 そうだよ、光江。今まであんなに頑張ってたんだから、光江なら 2、3 日の遅れなんて、すぐ取り戻せるよ。

光江 妙子、怒っていないの、わたしのこと？

妙子 ううん。あたしこそ、光江がまだすごく怒ってるんじゃないかって、心配してたんだ。それと先輩も、あれからずっと、すごく心配してくれてたんだよ。

水谷 そうだぞ。お前は頑張り屋だけど、反面、意地っ張りのところがあるから、頑固にいつまでも殻に閉じこもっているんじゃないかと思ってさ。

光江 先輩、妙子…。

ナレーション その時、あたしは本当に、自分の心の扉の硬く閉じられたカギが、外れていくような気がした。そして、今まで一人で抱えていた思いを、いつの間にか、二人の前に一気に吐き出していた。

妙子 光江、そんなに苦しかったなんて、あたし全然知らなかった。

水谷 高倉、よく話してくれたな。おれ、自分の受験の時のこと、思い出してたよ。おれも、本当は見栄っ張りな性格だから、結構つらい思いしたけど、教会には毎週行っていたから、いつも周りのみんなに支えてもらってた気がするなあ。

ナレーション そう言って水谷先輩は、自分の受験の時の経験を話してくれた。挫折しそうになった時、一生懸命お祈りして励ましてくれた、クリスチャンお友達のことも。

水谷 高倉。確かに受験は孤独な戦いだけど、何も独りで闘おうとしなくてもいいんだぞ。人間、周りの人たちを信じられなくなったら、寂しすぎるじゃないか。宮崎だっている。おれだっているんだ。今、お前に必要なのは、心を開いてだれかを信じることじゃないのか？

ナレーション あたしは、水谷先輩の言葉が、そして妙子の心配そうな顔が、無性にうれしかった。そして、まだ熱の引かないボンヤリした頭で、あたしは、自分を愛し、心配してくれる一人一人の顔を思い浮かべていた。今にして思えば、それは、水谷

先輩たちを通して、乾き切ったあたしに“信じる”ことを教えてくれた、見えない大きな力だったかもしれない。

< 完 >